
桜亡く

スケープゴート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜亡く

【Nコード】

N9308S

【作者名】

スケープゴート

【あらすじ】

桜の木の下で出会った一組の見知らぬ男女の話し。

「雷に打たれた時はもう駄目か、と諦めてしまったけれど」

言葉を切って、感心するように微笑みながら女は顔をあげた。

「桜は、強いよね。焼けてもこんなに美しい花を咲かせるのだから、空を仰いだ女の視界には淡い白の景色が風に揺らいでいた。」

昨年の夏、若葉が茂っていたはずの季節に雷に打たれて焼けた桜の大樹は、ところどころに焦げ跡を残しながらも空を覆うほどの花を咲かせていた。細枝に散った花卉の舞う隙に覗く青空との対比に、女は心の底から感動していた。同じ桜を咲かせた薄紅色の着物の袖で薄く張った涙の膜をそっと拭うくらいには、女は深く感動していたのだ。

「なにか、この桜には思い出があたりで？」

目尻を拭い終わるのを待っていたかのように問いかけられた言葉に、女は振り返った。

浅い笑い皺を刻んだ壮年の男性が、背で腕を組んで女を見ていた。淡く眩しい世界から浮いた、はっきりとしたダークブラウンの仕立てのいいスーツに帽子を合わせており、どこか古く、または懐かしい感じの男だった。

「ええ。この桜は母と交わした約束の証なんです。もうずいぶん前の話ですし、母もとっくに亡くなってしまっているんですけど」

最初こそ、いきなり現れた一点の墨のような男に驚いたものの、女はすぐに表情を和らげ愛おしそうに桜の太い幹を撫でた。見知らぬ男にためらうそぶりも無く女はデリケートであるはずの話しを零す。

「こんな、桜以外はなにもないところに来ているあなたも、もしかしたらこの桜に思い入れがある方？」

「ああ、そうですね。思い入れ、と言いますか……」

女が返した問いに、男も優しいなにかを思い出すように目を細め

て呟いた。

「ここだね、息子の灰を撒いたんです」

「息子さんの……」

「そう苦い顔をしないで下さい。今となっては穏やかな記憶です」
気まずそうにした女に、そう声をかけ男は桜を見上げた。

「息子は幼いながらも良く頑張ってくれました。生まれながらの病でね、心臓が弱かったんです。きちんんと体が成長してから、手術をさせるつもりだったんですけどね。その前に息子は発作で死んでしまいました。息子を病院に縛りつけることをしなかったのが、私にとって唯一の慰みですかね。長く、生きてほしいと望むのは親として当たり前ですけど、それ以上に私は息子に自由に過ごしてほしいかったです。息子の笑った顔を多く見たかったですし、息子に多くの光と人と景色を見せて触れ合ってたほしかった。それが私の想いだったんですが、息子は幸せだったのか、とふと思ってしまうこともありますね」

「——きつと、幸せでしたよ。病院の、白い景色ばかりを思い出に抱えて旅立つよりも、美しい色の景色の思い出を抱えて旅立つ方がきつと幸せです」

男は桜を見上げたまま、軽く目を見開いて、それを隠すように微笑んだ。

「そう言われると、私も救われます……。ここは小山の頂上でしょう。風が強く吹いて街を跨いで海に流れますからね。息子は、この桜の木も、街も、海も好きでしたから、風に乗ってどこへでも駆けて行けるようにと思ったんですよ。亡くしたときはまだ幼くて可愛かったものですから」

駆けまわって良くこけてもいましたがね。

男はそう言って笑った。笑い皺が深く影をつくり寂しげに見えたが、女はそれがこの男の最も優しい微笑みなのだと感じた。

そのとき、いっそう強く吹き抜けた風が桜の花弁を舞いあげた。二人は踊るように風に乗って飛んだ花弁を目で追った。女は乱れた

髪を片手で押さえ、男は浮きかけた帽子を押さえた。

「——この桜の花弁は、まるで木から逃げるように空や海や街の方へ散ってゆきますね」

青に白い花弁が溶けたころ、女はそう言って目を伏せた。薄紅色の着物の裾に散った桜も風にはためいた。

「私の母は体が弱い人でだったんです。そのせいなのか、心もまた弱い人でいつも眉根を下げて悲観に暮れた顔をした人でした。外へ出かけれゆくのも不得意な人だったから、母が生きていた頃に両親と出かけた記憶はほとんどありません。そんな母が唯一、私の手を引いて連れてきてくれた場所がこの小山の桜なんです。母はこの桜の木の下で、幼い私と目線を合わせるようにしゃがんで両手を握りながら約束をしよう、と切り出したんです」

目を伏せた女が、微かに眉根を震わせた。

「もし私いなくなったら、私のことを忘れてくれって」

「忘れてくれとは……」

「おかしいですよね。でも、忘れるようになって、約束したんです」

困惑して思わずつぶやいた男に、女は悲しげに頬笑みを唇に湛えて応えた。

「母は弱い人でしたから、きっと、この世界が嫌いだったんですわ。母にとっては痛くて辛いばかりだったはずですから。幼かった私には、母がいなくなったらということも母を忘れるということも、よくわかりませんでしたけれど……」

「……」

つい、と顎をあげて女が空を見上げたのにつられて、男も顔をあげた。

囁くように花弁を触れ合わせながら、満開の桜は透ける青とのコントラストを美しく醸し出していた。

重くはないがゆったりとした穏やかな質量のある沈黙が風と共に流れる。

「——ふふ」

「どうか、なさって……」

「いえ。ようやく、母との穏やかな思い出を思い出せたので、嬉しくて」

風に流れる黒髪を女が耳に掛けると、男には柔らかくほほ笑んだ女の瞳が見えた。

「母は、世界を嫌って、自分を忘れるようにと私と約束を交わしたのですけれど、それと同じにもう一つ、私と約束を交わしたんです」「もうひとつですか」

「ええ。母はきっと寂しかったんですわ。病の辛さは、痛みと苦しみと、それらと一人で戦うことの孤独でしょうから。母は忘れてくれと言ったのに、この花開いた桜の下では、自分のことを思い出してほしいと言ったんです」

女はくると実を翻して、桜の幹に背中を預けて目を閉じた。

「今だけは、こうして母と過ごした幸せな記憶に浸れます。それが、母との約束ですし、母が唯一許してくれた時間なんです」

溢れる記憶に浸るように力を抜いている女は、水を漂うようだった。

「そうでしたか。ならば、私はお暇した方がよろしいですかな」

「ああ、いえ。ここは誰の物でもありませんし。こうして、人に思い出しをするのもまた、母は喜びます、きっと」

「そうですか」

「ええ」

「不思議なものですね。お互い、まったく知らぬもの同士でしたが、今、目の前にいるあなたの方が、私のことを私自身よりも知っているような気がします」

「まったくですわ。お互い、初めてのもの同士ですが、今、目の前にいるあなたの方が、私よりも私のことをよく理解しているような気がしますもの」

自然と見つめ合う二人は、この日初めて視線を通わせた。ひとひら、ひとひら、風に舞った桜の花弁が二人の間に落ちてゆく。

「きっと、あなたのお母様がそうさせているのでしょね。これまでになく、私の心は穏やかだ」

「私ですわ。こんなに心が静かなのはきっと初めてですもの。あなたの息子さんが、そうさせてくれているのでしょね」

一陣の風が舞い上がった。温かな、春一番の風であった。

（後書き）

久しぶりに書いた小説でした！

力が入った割には短かったような気がします……まあ、自分が書いたものは全部これくらいだったよなと思って流します。

ちぐはぐな文章になっていないか、それだけが心配です。そう感じた時は遠慮なしに突っ込んでくださいませ。

読んでくださった方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9308s/>

桜亡く

2011年5月2日16時40分発行